

救いを黙って待つのは良い

2010.1.26(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

イザヤ書 40章25節から41章1節

「それなのに、わたしを、だれになぞらえ、だれと比べようとするのか。」と聖なる方は仰せられる。目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方は、その万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもって、呼ばれる。この方は精力に満ち、その力は強い。一つももれるものはない。ヤコブよ。なぜ言うのか。イスラエルよ。なぜ言い張るのか。「私の道は主に隠れ、私の正しい訴えは、私の神に見過ごしにされている。」と。あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかけて上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。島々よ。わたしの前で静まれ。諸国の民よ。新しい力を得よ。近寄って、今、語れ。われわれは、こぞって、さばきの座に近づこう。

20年前だったと思いますが、御代田の新しい家のために、二人の姉妹にみことばを書いてもらいました。一つは、コロサイ書1章10節に書き記されているみことばです。「主のみこころにかなった生活をして、真に主を喜ばせよう」。家内と私の婚約、また結婚指輪に彫り込まれたみことばです。もう一つのみことばは、今読んでいただきましたイザヤ書40章28節からのみことばです。私は自分の家に飾ったのです。でももったいないと思い、第一ゲストハウスで飾るようになりました。その後ここに掛けられている、みことばです。内容はもちろん誰にでも分かります。疲れた人に対する呼びかけです。或いは、敗北の原因とは何か。

勝利の生活の秘訣は、いったい何でしょうか。重病人になり、何十年間も寝たきりになった一人の姉妹は祈りの大切さを知るようになり、数えられないほど多くの人々のために祈りました。どのように祈ったかと言いますと、「主よ。あの兄弟この姉妹が、あなた様の御前に静まることができますように」と。

主の御前に静まることこそ、最も大切なことではないでしょうか。主の御前に静まると次のような確信が与えられます。「雲があっても、私は太陽の存在を信じます。主なる神が沈黙しておいでになっても、私は主の愛を疑いません」と。主の御前に静まると、例外

なく、すべてが益えきになります。イエス様のおとりになった態度、また告白こくはくは、本当に素晴らしいと思います。

ヨハネの福音書 12章27節、28節

「今わたしの心は騒さわいでいる。何と言おうか。『父よ。この時からわたしをお救いください。』と言おうか。いや。このためにこそ、わたしはこの時に至いたったのです。父よ。御名みなの栄光を現わしてください。」そのとき、天から声が聞こえた。「わたしは栄光をすでに現わしたし、またもう一度栄光を現わそう。」

もう一箇所、

マルコの福音書 14章36節

またこう言われた。「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯さかずきをわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。」

このような態度をとられたのは、もちろんイエス様だけです。今読んだイザヤ書41章1節に、「主の前に静まれ」とあります。似ている箇所は聖書の中にたくさんあります。哀歌あいか 3章26節

主の救いを黙って待つのは良い。

詩篇 62篇1節

私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の救いは神から来る。

とあります。

主の御前に静まることの必要性を、私は最近改めて教えられました。ただ、「静まれ」。「待ち望め」。「主にすべてをゆだねよ」と。ここ吉祥寺きちじょうじには、「静けさ」という名前の喫茶店きっさてんがあります。そのことに気づかなかった人もいるかもしれません。看板かんばんにはドイツ語で書かれているからです。『ルーエ』と書いてあります。「静けさ」の意味です。

現代人げんだいじんが一番必要としているのは、静まることではないでしょうか。同じイザヤ書40章の最後の節せつを見ると、そこには疲れむりよくや無力さ、或いはたゆむことなどが記しるされているのが分かります。もし私たちが本当に正直しょうじきに偽いつわることなく主の前に出るなら、私たちは自分が疲れて、無能力むのうりよくで、たゆむ者であることを告白せざるを得ないのではないのでしょうか。

このことは次の三つのことに証明しょうめいされています。即ち、
第一の証明は、神のみことばがそのことをはっきり言っているということ。

第二の証明は、他の信者たちを見ることによって分かること。

第三の証明は、私たち自分の経験けいけんによって教えられるということ。

主のことばは、主の民たみの中にも疲れている者、無力の者がいるということ、はっきり述の

べています。私たちは、確かにしばしば疲れて喜ばず、力も勇気も失われてしまっている状態に陥ることがあります。30節によると、多くの信者の特徴に、疲れ、たゆみ、つまり倒れることのあることが分かります。それこそが敗北の原因であると、みことばは語っています。

私たちは自分自身のことや他人のことを見ると、そこに無力さが支配しているを見ることができ、しかも主のたいなる力よりも人間の無力さのほうが目に映るのです。そのようなことは誰も認めたくないことですが、しかしそれは現実が事実であり、問題は私たちがそれを考えたり認めたりするか、しないかではなく、それが否定できない事実であるということです。私たちが率直に反省するなら、実際に多くの者が疲れ、無力で、たゆんでいることを認めざるを得ません。わずかな信者だけが、『鷲のように翼をかって上ることができる。』というみことばを自分のものとしているのでしょうか。この、「鷲のように翼をかって上る」、これこそあらゆる勝利の秘訣です。

次に、一つの大切な問いについて考えてみたいと思います。

いったい私たちの敗北の原因は何でしょうか。なぜ私たちは疲れ、たゆむのでしょうか。

- ・その原因の第一は、私たちが本当に満たしてくれる源泉を知らないことであり、
- ・第二の原因は、提供されているものを受け取ることを怠ってしまうことです。

* 第一の原因。私たちが満たして下さるものの源を知らないこと。

無知とは何か。それは恐ろしいもの、悲劇的なもの、許すべからざるものを意味しているのです。ホセア書4章6節、主の嘆きのことばと言っても良いかもしれません。

ホセア書 4章6節

わたしの民は知識がないので滅ぼされる。あなたが知識を退けたので、わたしはあなたを退けて、わたしの祭司としない。あなたは神のおしえを忘れたので、わたしもまた、あなたの子らを忘れよう。

これはまことに重要なみことばです。そこで、ここに書かれていることについて内容的にその順を追って考えてみることにしましょう。

第一に、未信者ではないのです。主なる神の民に属する信者が、知識を退けた。即ち、上からの光を退けた、と記されていることに注意しましょう。その結果、知識がないという状態に必然的に陥ってしまうのですが、それだけでなく、主なる神はそのような信者を退けてしまう、と書いてあるのです。その意味は、永遠のいのちにあずからないとか、永遠の滅びに至るとかいうことではなく、そのような信者が主の祭司となることはできない。つまり、主に用いられないということの意味しているのです。そして、そのような信者は主の教えを忘れてしまう、とみことばは語っています。

自分の思っていることは正しいと思っている人は、盲目にされています。同じことを、イエス様は聖書学者、律法学者たちにも言っておられます。

マタイの福音書 22章29節

しかし、イエスは彼らに答えて言われた。「そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからです。」

知らないこと、即ち無知であることは、非常に恐ろしいことです。恐ろしい結果をもたらすからです。結果は思い違いをして間違った方向へ行ってしまふ、的外れの人生を歩むことを意味しているのです。

前に読んでいただきましたイザヤ書40章28節、29節に、同じことを見ることが出来ます。即ち、「あなたは知らないのか、聞いていないのか」と無知を責めておられます。

私たちはいったい何を知るべきでしょうか。私たちは、私たちが満たして下さるもの源を、つまり主ご自身を、知るべきです。その答えは、同じく40章28節29節に見出すことができます。

イザヤ書 40章28節、29節

あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。

即ち、それは、「永遠の神」、「地の果てまで創造された方」、力を持つお方です。私たちの神は永遠なる主です。そのお方は初めも終わりもありません。その主は、永遠に変わらないお方です。そしてまた、私たちの主は万物の造り主であります。即ち、そのお方は過去において、目に見えるもの、目に見えないものをすべて造られただけではなく、今もなお新たなものをお造りになっておられる、生きておられるお方です。主は生きておられ、支配しておられるお方です。

先日、また思い出したのです。沖縄のM・T姉妹は大学の教授ですが、車で移動中に脳溢血になり、とんでもない事故になって、その後手足が思うように動かなくなってしまったのです。初めて見舞に行ったときには、結局あまり話せず、泣くばかりでした。姉妹はもう今の人生はお終いと思ったのです。後に悔い改めてイエス様を受け入れてから変わりました。イエス様と一緒に病気になるのは良かった、と思うようになりました。それだけではなく、奇跡を経験するよりも自分が奇跡にならなくてははいけない、と言ったのです。結局、悩みながら喜ぶ者となったのです。イエス様が生きておられる証拠です。

私たちの主は、「無いものを有るものようにお呼びになる方」とローマ書4章17節に書かれています。また詩篇の作者は、33篇9節に『まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ。』と書いています。主が仰せられ、命じられると、無から有が出現し、死んだ者が生き返ることが実現されるのです。

そして、主は、「力と鍵」を持っておられる方です。私たちの側は、無力さ、疲れなどが

満ちていますが、主はどうかと言いますと、そこには全知全能の力があることが分かります。そして、その永遠なる神、造り主なる主、全知全能なる神は、私たちの敗北を勝利へと変えてくださる素晴らしい約束を私たちになさっているのです。この力と強さの尽きることのない豊さを私たちに提供なさっています。ですから、私たちはこの提供されたものを受け取らなければなりません。つまり、私たちが主と結びつくことによって、超人間的な力を体験することのできるものの源と結びつくことになるのです。したがって、私たちは、今私たちの敗北の第一番目の原因を考察することになるわけです。

一番目の原因は、私たちを満たしてくださるものの源を知らないことでした。

* 第二の原因。主によって提供されたものを受け取ることを怠ること。

これもまた、恐るべきこと、悲劇的なことです。イザヤ書40章に戻りまして、29節『疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。』を見ると、私たちの主は、私たちにとって必要なもの、即ち力と強さを与え、提供することを約束してくださっていることが分かります。主なる神は与えてくださる、そして私たちはそれを受け取り、自分のものにする必要があるのです。これこそ、主の提供に対する答えであるべきです。

問題は、「受け取るとは何を意味するのか」、「どのようにしたらそれを自分のものにすることができ」、「提供されたものを自分のものとするか」ということです。その答えを私たちは、31節『主を待ち望む者は新しく力を得、驚のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。』に見出すことができます。即ち、「主を待ち望む」ことです。

では、主を待ち望むとはどういうことなのでしょう。それは、祈ったり、礼拝したり、集会を訪ねたり、聖書を読んだりすることを意味するのでしょうか。もちろん、それらのことも当然含まれるわけですが、ここで一番大切なことは、前に読みました41章1節『わたしの前で静まれ。諸国の民よ。新しい力を得よ。近寄って、今、語れ。われわれは、こぞって、さばきの座に近づこう。』にあるように、神の前で静まることです。これはこんにち一番大切なことであると思います。ダビデ王もまた、このことを知るようになっただけでなく実行しました。詩篇62篇を見ると、彼は次のように告白するようになりました。詩篇 62篇5節から8節

私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の望みは神から来るからだ。神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私はゆるがされることはない。私の救いと、私の栄光は、神にかかっている。私の力の岩と避け所は、神のうちにある。民よ。どんなときにも、神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神は、われらの避け所である。

ダビデはいろいろなことで悩みました。苦しみました。しかし、「私の魂は黙って、ただ神を待ち望む」と言うようになったので、やはり「主に頼るものは失望させられること

がない」と、当時のイスラエルの民に励ますことができたのです。箴言 8 章 3 4 節を読むと、一文章だけですが次のように書かれています。

箴言 8 章 3 4 節

幸いなことよ。日々わたしの戸口のかたわらで見張り、わたしの戸口の柱のわきで見守って、わたしの言うことを聞く人は。

聞こうと望む人は、聞く耳を持つようになります。主の前に静まらないキリスト者は、主のお語りになることを聞くことができませんし、また主の語られることを聞かない者は主に従うこともできません。その不従順の結果は、主の祝福にあずからないということです。

主を待ち望むということは、すべてを主に明け渡すこと、徹頭徹尾主により頼むこと、主のみことばに従うこと、そして主と主の導きに本当に信頼することを意味します。そして、より頼むこと、主を信頼することは、意識的に自分自身を信頼しないこと、またあらゆる人間的な助けにより頼まないことを意味しているのです。

そのような態度の結果は、どのようなものでしょうか。そして、主を待ち望む者はどのようなことを体験することになるのでしょうか。言い換えれば、主の前に静まる者は何を経験するのでしょうか。そしてそのことは、目に見えるものすべてのものから目を離し、意識して主のみより頼むこと、ただ主のみこころにのみお従いする備えがあることを意味します。

主の前に静まる兄弟姉妹は、次の事がらを経験するようになります。今のイザヤ書 40 章 3 1 節『しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。』と書き記されています。

まず私たちの弱さの代わりに主ご自身の力が現われるということです。主を待ち望む者は新しく力を得る、と約束されています。即ち、人間的な努力の代わりに、主がご自身の創造的な力を現わしてください。何という違いでしょうか。

私たちはなぜ敗北してばかりいるのか考えたことがあるのでしょうか。それは私たちが自分の力により頼むからであり、そのことが主の働きを妨げ、私たちの行ないが主の御手をしばってしまうような結果をもたらすのです。自分の不完全さを知っている者は、幸いです。その人は主の御前に静まり、主の力と主の強さを豊かに経験することが許されています。

それでは、いったい主は私たちにどのような強さを提供してくださるのでしょうか。

* 第一に、肉体的な力を与えてくださいます。

詩篇の作者であるダビデは元気になりました。どうしてでしょう。詩篇 16 篇を読むと分かります。彼は次のように告白しました。

詩篇 16 篇 8 節

私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。

解決できない問題ではありません。自分を誤解して迫害した人間ではありません。『私はいつも私の前に主を置いた。主が私の右におられるので私はゆるぐことがない。』と。

11節

あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。

昔、ドイツのアドルフ・ヒットラーは宣言して言いました。喜ぶことによって力が出る、と。聖書もだいたい同じことを語っています。ネヘミヤ書8章10節「主を喜ぶことはあなたがたの力です」と。

主の御前に静まる者は、肉体的な力と強さを与えられ、活気を与えられるのです。

*第二に、主は魂の力を与えてくださいます。

主ご自身が私たちの知恵の源であり、私たちが自分の能力に基づかず、主にのみより頼むとき、主は私たちの考え、願いをみこころのように導いてくださるのです。このことをパウロはみことばで表現しています。

ローマ人への手紙 12章2節

この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。

他の者と違う心を持ちなさい、と。

パウロは、今度はエペソにいる兄弟姉妹に書き記したのです。

エペソ人への手紙 4章23節、24節

またあなたがたが心の霊において新しくされ、真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。

「新しい人」とは、即ちイエス様のことです。もう一箇所、

テモテへの手紙・第二 1章7節

神が私たちに与えてくださったものは、臆病の霊ではなく、力と愛と憤みとの霊です。

*第三に、主は道徳的、また霊的な強さを与えてくださいます。

しばしば罌が待ち受けているこの地上では、私たちがこの強さを必要とします。

ですから、パウロは愛弟子であるテモテに書いたのです。

テモテへの手紙・第二 2章1節

そこで、わが子よ。キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。

エペソ人への手紙 6章10節

終わりに言います。主にあって、その大能^{たいのう}の力によって強められなさい。

と。

私たちの主は、霊的な力、即ち主の霊の力を与えてくださいます。弟子たちはこの力を受けようになりました。イエス様は天に上げられる直前^{ちよくぜん}に弟子たちに言われました。ルカの福音書 24章49節

「さあ、わたしは、わたしの父の約束して下さったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」

この予言^{じつげん}の実現^{じつげん}は、使徒行伝^{しとぎょうでん} 1章8節で語られています。

使徒の働き 1章8節

「しかし、聖霊^{せいれい}があなたがたの上に臨^{のぞ}まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、および地の果^はてにまで、わたしの証人^{じょうにん}となります。」

イスラエルの民もこの励^{はげ}ましのことばが必要でした。

イザヤ書 30章15節、16節

神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰^{おほ}せられる。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」しかし、あなたがたは、これを望まなかった。あなたがたは言った。「いや、私たちは馬に乗って逃げよう。」それなら、あなたがたは逃げてみよ。「私たちは早馬^{はやうま}に乗って。」それなら、あなたがたの追^おっ手^てはなお速^{はや}い。

人間とは、そのように愚^{おろ}かな者なのです。

静かにすれば救われる。落ち着いて信頼すれば力を得る、と約束されています。パウロはこの力を経験し、次のように告白することができました。有名な箇所です。そして非常に素晴らしい証しです。

コリント人への手紙・第二 12章7節

また、その啓示^{けいじ}があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげ^{つが}を与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。

「一つのとげ、一つの病気のことでしょう。主はサタンの使いさえも用いられたのです。パウロが高ぶることがないように。高ぶるとお終いだからです。神は高ぶる者を退けられます。信者もそうです。信者だけではありません。

コリント人への手紙・第二 12章8節から10節

このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。

主を待ち望む者、つまり主の前に静まる者、意識して主により頼みたいと思う者は、いったい何を経験するのでしょうか。

まず、私たちの弱さの代わりに主の力が現われることです。

二番目に、高められた生活にあずかる者となります。

イザヤ書 40章31節前半

しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。

とあります。有名な音楽家であるヨハン・セバスチャン・バッハは、「我、喜びて十字架をになわん」というカンタータの中で、次のようなことばを使いました。「私は主にあって力を得、鷲のように激しくこの地上から飛び立ち、倦むことなく飛び回るだろう」と。この音楽を聴くと本当に嬉しくなります。希望そのものが湧いてくるからです。この高められた生活、即ち鷲のようにこの地上から飛び立つ生活は、信じる者の特権です。

鷲という鳥は、鳥の中でも一番高く飛ぶことのできる鳥であり、その鷲の飛ぶ様子はあまりにも高すぎるために、望遠鏡なしには見ることのできないほどのものです。しかし、これこそ、私たち信者が属する場所であり、すべてのものに勝って高い座です。ピリピ人への手紙の中で、パウロは信じる者の告白として書いたのです。

ピリピ人への手紙 3章20節

けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。

『私たちの国籍は天にあります。』いつかある、のではありません。今、です。

エペソ人への手紙 2章6節

キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。

『ともに天の所にすわらせてくださいました。』^{かこかたち}過去形です。

私たちはイエス様とともに高く引き上げられているか、さもなければ地上のことばかりを考えるかのどちらかです。ここで地上のことばかりを考えると、地上のことによって縛られ、^{そくばく}がんじがらめに束縛され、地上の^{おもに}重荷を負わされていることを意味しているのです。多くの信者は、^{はね}羽の破れた鳥のように、飛ぶことを考えず、せいぜい地面の上を歩くことしかできません。また、信じる者の中には、光を嫌い、光の中を歩もうとしないで、もぐらのようになってしまっている人もいます。もしそうであるなら、その人はこの素晴らしい経験を少しも持つことができず、主にあって力を得ることもできません。私たちは鷲のような翼をかって飛び立つべきです。

旧約聖書の中に、私たちはそのような良い例^{れい}を見ることができます。12人の^{ぞくちやう}族長たちが約束されたカナンという地を調べるためにつかわされ、そのうちの10人の者はイスラエルの民に次のように語ったのです。

民数記 13章33節後半

『...私たちには自分がいながらのように見えたし、彼らにもそう見えたことだろう。』

しかし、残りの二人は鷲のように翼をかって飛び立ったのです。彼らの告白は次のようなものでした。

民数記 13章30節

そのとき、カレブがモーゼの前で、民を静めて言った。「私たちはぜひとも、上って行って、そこを^{せんりやう}占領しよう。必ずそれができるから。」

10人の族長が見たことと残りの二人が見たことは、もちろん違うものではなく同じものでした。しかし10人の族長は自分たちの人間的な思いで考え、行動したのに対して、残りの二人はただ主のみを^{あお}仰ぎ見、主にのみより頼むことによって高く引き上げられ、主にとって^{ふかのう}不可能なことはない、何一つない、ということを知ることができたのです。主は、私たちをいながらのような^{じやうたい}状態から引き出そうとしておられます。ですから、聖書は語っています。

コロサイ人への手紙 3章1節から3節

こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に^ま座を占めておられます。あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。あなたがたはずでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに^{かく}隠されてあるからです。

即ち、これこそ主を待ち望むこと、主の前に静まることを意味しているのです。

今話しましたように、

一番目。私たちの弱さの代わりに主の力が現われ、

二番目。高められた生活にあずかる者となり、

そして、

三番目。主の奇跡的な行ないが明らかになるということです。

即ち、走ってもたゆまず、と書いてあります。走ってもたゆまないということは、普通の状態ではありません。普通は100メートル、200メートル、400メートル、800メートル走った後でもう疲れ切ってしまうのです。けれど、主を待ち望む者、主の御前に静まる者、徹頭徹尾主により頼む者は、走ってもたゆまないということを体験できます。超自然的、そして超人間的な力が約束されています。なぜなら超人間的な課題が私たちを待っているからです。

奇跡を行なう主と結びついている人は、ある意味においてもはや普通ではありません。その人は走ってもたゆまないからです。パウロもこの超人間的な力を次のように告白しています。

コリント人への手紙・第二 4章8節から10節

私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に暮れています、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。

パウロの言っているこのことばは、内容は決して普通の事からではありません。普通は四方八方から苦しめられると、人間は窮してしまいます。途方にくれたり、迫害されたり、倒されたりする者は、普通は哀れな者です。しかし、主に結びついている者は驚のように翼をかって飛び立つことができ、走ってもたゆまず前進できるのです。主の前に静まり、本当に主を待ち望む者は、羨ましがられるはず。なぜなら、超自然的な力がその人を満たすからです。

イエス様は言われました。

ヨハネの福音書 7章38節

「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」

ヨハネの福音書 14章12節

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしを信じる者は、わたしの行なうわざを行ない、またそれよりもさらに大きなわざを行ないます。わたしが父のもとに行くからです。」

と。

私たちの中から本当に生ける水が流れ出ているのでしょうか。私たちはイエス様が言わ

れたわざよりも、更に大いなるわざをなしているのでしょうか。一つの素晴らしい約束が記されています。

ヨシュア記 23章10節

「あなたがたのひとりだけで千人を追うことができる。あなたがたの神、主ご自身が、あなたがたに約束したとおり、あなたがたのために戦われるからである。」

私たちは、新たに意識して主の前に静まるうではないでしょうか。そのことによって、今話しましたように

- 一番目。私たちの弱さの代わりに主の力が現われ、
- 二番目。私たちは高められた生活にあずかる者となり、
- 三番目。私たちを通して、主の奇跡的な行ないが明らかになります。

四番目。圧倒的な勝利の日常生活を体験することができます。

歩いても疲れない。ここでは、走っても疲れないではなくて、歩いても疲れない、と書かれていることに注意しましょう。歩くということは、私たちの日常生活の行ないを表わします。多くの場合、普通は歩くことよりも、走ることのほうが易しいことがあります。実際生活の中で、主とともに歩むということは最も難しい使命でもあります。エノクという男について、聖書は語っています「エノクは神とともに歩んだ」。新約聖書を見ても書かれています。

ヘブル人への手紙 11章5節、6節

信仰によって、エノクは死を見ることのないように移されました。神に移されて、見えなくなりました。移される前に、彼は神に喜ばれていることが、あかしされていました。信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。

『信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。』、大切な事実です。信仰がなくては、即ち主の前に静まることなくしては、主に喜ばれることはありません。そしてこのエノクは、結局死をみないで、そのまま天に引き上げられました。空中再臨のようなことを経験しました。

もう一人いました。エリヤという男も、死を見ずに天に移されました。彼の日常生活の特徴は、主の前に意識して立つことでした。

列王記・第一 17章1節後半

「私の仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。」

『主は生きておられる。』、これはエリヤの動かすことのできない確信でした。

列王記・第一 17章3節から5節

「ここを去って東へ向かい、ヨルダン川の東にあるケリテ川のほとりに身を隠せ。そして、その川の水を飲まなければならない。わたしは鳥に、そこであなたを養うように命じた。」それで、彼は行って、主のことばのとおりにした。すなわち、彼はヨルダン川の東にあるケリテ川のほとりに行って住んだ。

ここで大切なことは、主が言われたそのところで主が養われる、ということです。主が遣わされたそのところで主が養ってくださるのです。そして、エリヤが主に忠実に従ったため、彼は圧倒的な勝利者となったのです。エノクやエリヤだけではなく、ある意味でダビデも同じようなことを経験したのではないかと思います。ダビデは、この地上のすべてのものから目を離し、また、主にのみ従って行くことを決心しました。前に読みました箇所です。

詩篇 16篇8節

私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。

11節

あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。

信じる者の中にも、敗北を恥とすべきことがたくさんあります。なぜでしょう。いったい何が原因なのでしょう。なぜ私たちは疲れ、たゆみ、そして躓き、倒れるのでしょうか。前に言いましたように、

原因の第一は、私たちが満たすものの源を知らないからであり、

原因の第二は、提供されたものを受け入れることを怠ってしまうことです。

なぜしばしば、私たちは失望落胆し、問題の前に途方に暮れ、自分のみじめさや失敗に気づくのでしょうか。そのような状態のとき、私たちは詩篇の作者が感じたことを理解することができるのではないのでしょうか。詩篇55篇に次のように書かれています。もちろん、ダビデです。

詩篇 55篇6節から8節

「ああ、私に鳩のように翼があったなら。そうしたら、飛び去って、休むものを。ああ、私は遠くの方へのがれ去り、荒野の中に宿りたい。セラ あらしとはやてを避けて、私のがれ場に急ぎたい。」

詩篇の作者は、最初は遠くへ逃げるために翼が欲しかったのです。そのような逃げるための翼を主はお与えになりません。その後でダビデは、問題を解決する鍵が与えられたために彼は次のように言いました。

詩篇 55篇22節

あなたの重荷おもにを主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさない。

彼は逃げるための翼ではなく、高く飛び立つための翼を与えられました。自分の重荷を主にゆだねる者は決してゆるがされることがありません。悩みや苦しみ、そして立ちどころの困難の山は、私たちが主の前に静まるため、私たちが本当に主を待ち望むために必要なものです。主の前に静まる者、主を待ち望む者は次のことを経験することができます。即ち、主が重荷を取り去ってくださり、問題を解決してくださるので、私たちは自由な者となり、鷲のように翼をかって飛び立つことができます。

あなたの敗北や失敗の原因は、あなたを満たすものの源を知らないからです。

そして、私たちの前にある無知むちや問題にとらわれることなく、ただ主だけを中心にする必要があります。なぜなら主は今日も、後ろの壁かべに掛かかっている額がくに書かれていることばをもって呼びかけておられます。『あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。』と。

私たちの失敗や敗北の原因は、提供ていきょうされたものを断ことわることです。

ヨシュアとカレブは、提供されたものを受け取りました。前に読みましたように、そのとき、カレブがモーセの前に民を静めて言った。「私たちはぜひとも上って行ってそこを占領せんりょうしよう。必ずかならずそれができるから。」

このように、彼らは主のみことばを真理しんりとして受け取り、約束されたものを自分のものとすることができたのです。

了